

～新型コロナ後の活動を考える～

「静かなる技術倫理—国難を少しでも救う志—」と共に

1. はじめに

新型コロナウイルスが、全世界で猛威を振るい、人命はもとより、社会・経済のシステムが危機的な状況に陥っています。日本技術士会北海道本部では、当会を含め各委員会の活動を自粛し、感染の拡大の抑止に取り組んでいるところであり、そういう状況下での活動報告レポートの提出ということで、思案いたしました。今回は「静かなる技術倫理」という書籍のご紹介を中心に、さらにこの新型コロナ禍を踏まえた当会の今後の活動展望について述べさせていただきますと思います。

2. 危機管理研究会の活動

■活動の目的と成果報告書

書籍のご紹介の前に、当北海道スタンダード研究委員会のコアメンバーの大半が、発足以前に活動していた青年技術士協議会（現青年技術士交流委員会、以下青技協という）の自主研究グループ「危機管理研究会」をご紹介させていただきます。

「危機管理研究会」は、2004年6月に発足し、当時、道内企業等の不祥事が立て続けに発生し、事業継続の危機にさらされたことを受けて、漫然とみていることができなかった青技協の有志が集い、“組織の危機管理”を技術士が継続的に取り組むべきテーマとし活動を始めたものです。活動目標として、「様々な分野で活躍する技術者およびそれぞれの組織の危機管理能力の向上を目指すこと」、また「組織の危機管理の必要性を認知する技術者を増やし、「危機管理」をより身近なものとする」としておりました。

2年4ヶ月の活動の中で、当時の青技協の中には、「そんな暗い話題で活動するのか」と言った方もい

らっしゃいました。確かに危機対応の事例の集積や分析、検証といった作業はかなりネガティブな視点を求められますし、地味で忍耐のいる作業でしたが、形に残すことで、必ずや次の世代の役に立つはずだという思いで活動しておりました。

2006年10月には研究会の成果報告書として「技術士の視点で『組織の危機管理を考える』」をまとめあげて発刊し、この活動にピリオドを打ちました。この成果報告書は、後に滝川工業高校の授業の教材として活用され、活動成果として一定の評価をいただいたのではないかと考えております。

この研究会発足のきっかけにもなった道内企業で相次いだ不祥事については、あえてここではご説明しませんが、報告書には危機管理事例として、事故、食中毒、偽装、偽計、漏洩、不正、隠蔽など全部で27の事例を紹介した上で、本来求められるべき危機対応のあり方についてまとめています。

■危機対応ができる技術者を目指す

この活動では、実際に危機対応、危機広報ができる技術者を目指すということで、国の原子力防災研修の講師（当時）を務められていた（株）アイ・アールジャパンの田口淳子氏を特別顧問にお迎えし、危機時の企業活動の大切さをご指導いただきました。田口氏はその豊富な知見の中から、国内外のこれまでの危機対応の成功例、失敗例として「ジョンソン・エンド・ジョンソン 毒物混入事件」、「参天製薬 異物混入事件」、「オダワラ社 集団食中毒事件」などの数多くの事例をとりあげ、危機管理の視点からそれぞれの危機対応を検証し、どういうマスコミ対応やダメージコントロールが適切であったのかを丁寧に指導してくださいました。

この危機管理研究会の時のコアメンバーが、現在の北海道スタンダード研究委員会の幹事として活躍しており、当会の活動を粘り強く続けられている力になっています。

また当時の活動成果は、現在も貴重な財産として有形無形で引き継がれており、その具体的な事例こそが、今回ご紹介する書籍「静かなる技術倫理」の第 4 章であります。すなわちこの「静かなる技術倫理」は、当時、危機管理研究会で活動していた正岡氏（現北海道スタンダード研究委員会 副代表）が、その活動成果の一部を倫理の視点から深化させ、そこに独自に事例を積み上げて発展させたものなのであります。

3. 「静かなる技術倫理」

本書は、技報堂出版から今年 3 月に発刊され、北海道大学名誉教授の佐伯昇教授をはじめ、同大学工学研究院の横田弘教授、北武コンサルタント技師長の冨澤幸一氏、シー・イー・サービス執行役員の正岡久明氏らの著作によるものです。



静かなる技術倫理 表紙

本書の副題が「国難を少しでも救う志」とあるとおり、今の新型コロナウイルスの感染拡大という状況を鑑みても、大変重要なことが多く書かれていると感じ、大変僭越ではありますが、いくつかのフレーズを抜粋してご紹介させていただきます。

■序論

「我々は国難の中に入りつつある。容易ではないことが予想される。大規模地震の可能性、災害の多発、温暖化、疫病、少子高齢化、格差、社会的ひずみなどの問題がある。これに続いて多くの国での国際的不和、経済の停滞、人々の疲弊から自己中心的、無関心の世の中に進みつつある。

技術者は自然災害を中心に国難に正面からぶつかり多くの課題やジレンマの解決を、志、覚悟を持って実践にうつす。日本人の心の中には何千年前より

培われた大災害に耐え抜いた DNA が温存している。安全文化、連携の倫理が蓄積している。呼びさます時がきたのである。（以上、抜粋）」

■「国難を思う」（はじめに）

「国難が迫っている。いつとも、どれほどとも、わからない大災害、苦難に立向かうことになる。少しでも早く、人々の国難を小さくしようとする力が合流するように倫理・技術倫理の力を引き出す働きをする。（以上、抜粋）」

■物の豊かさより心の豊かさ（第 1 章）

「科学技術の発展によって、便利で豊かな生活をおくることができるようになった。いつでも美味しいものが手に入り、車や飛行機で国内外を自由に遊ぶことができる世の中になった。しかし科学技術の発展は、常にマイナスの面を持っている。将来的な負の遺産を背負うことになる。これが今日の苦悩とも言える。これを軽くするにはどうしても人々の倫理の力を結集し、本当の豊かさを感じる世の中をつくる必要がある。国の調査においても物の豊かさよりも、心の豊かさを国民は望んでいる。人の根底にあるこの人間性に、小さくとも将来の方向性が見える。（以上、抜粋）」

■技術倫理の不文律（第 2 章）

「社会に降りかかる国難を凌駕するためには、文明がどのように変わろうとも、人がより人らしく生きぬく術として、特に技術者は工学的知識だけを能力とするのではなく、的確な倫理的判断力の堅持が必須であり資質になると考えるべきである。（以上、抜粋）」

■自律的判断を磨く（第 3 章）

「科学技術は、夢をかなえる玉手箱のように、人々の暮らしを豊かにし、夢を育み、実現してきた。これまで、科学技術は留まることがないほどの勢いで爆発的な発展を遂げ、人々を照らしその期待に応えてきたと言えよう。一方で、同時にそれらは影ともいべき副作用を生み出してきた。（中略）科学技術

の発展による便利さの代償として、人間自身の思考力と判断力を衰弱させ幼稚化させているとしか思えないような問題が噴出してきている。(中略)適切でないこととそうでないことを判断できる能力が欠落し、他人を尊重し自分と異なる意見を尊重する配慮の欠如もまた深刻である。これらは、まさに技術倫理が必要とする自律的判断能力を、現代人は失った結果ではないかと考える。(以上、抜粋)」

■志を抱いて(第3章)

「技術者の判断が他者に大きな影響を及ぼす可能性がある。技術者は一般の人が持ち得ない知識や知り得ない情報、および特別な能力を持っていることから、これらを「持つべき者」が果たすべき役割がある。例えば、劣化の進んだ橋梁があるとして、この橋梁を通行しても安全かどうかを一般の人は正確には判断できない。しかし、維持管理を行っている技術者には、ある程度の精度をもってそれが判断できることになる。そしてその判断した結果を正確に一般の人に伝達することで、彼らは安心して通行を続けられるか、通行をやめて遠回りをするかを選択できる。このように「持つべき者」の判断には、純粋かつ崇高な使命感を伴う。(以上、抜粋)」

■利他の心(第4章)

「稲森和夫 OFFICIALSITE では、「・・・私たちの心には「自分だけがよければいい」と考える利己の心と、『自分を犠牲にしても他の人を助けよう』とする利他の心があります。利己の心で判断すると、自分のことしか考えていないので、誰の協力も得られません。自分中心ですから視野も狭くなり、間違った判断をしてしまいます。一方、利他の心で判断すると『人によかれ』という心ですから、まわりの人みんなが協力してくれます。また視野も広がるので、正しい判断ができるのです。より良い仕事をしていくためには、自分だけのことを考えて判断するのではなく、まわりの人のことを考え、思いやりに満ちた『利他の心』によって判断すべきです・・・」と語っている。(以上、抜粋)」

■日本たらしめるもの(第4章)

「日本が守るべきものは何か。日本を日本たらしめるものは何か。それは日本人が有する「堅実さ」「勤勉さ」「正直さ」などに代表される一流の民度であり、そこから生み出される最高水準の品質である。しかし、日本のものづくりの信頼が揺らぎ始めている。底力が試され、真価が問われている時だからこそ、日本のものづくりに携わるすべての人が倫理観の高い姿勢で行動して、日本の信頼を守り抜くべきである。一人ひとりの倫理観が、そしてあなたの倫理観がものづくりの砦になる。

いつの時代も忍耐強く慎重に行動する人、正しいと思うことを目立たずに実践する人によって、日本の品質は支えられてきた。幾星霜を経て日本が築き上げた品質の信頼をより堅牢にして次の世代に渡すことが、私たちの責務である。(以上、抜粋)」

と、本書では述べられています。新型コロナウイルスの感染という国難を乗り切るために、我々技術者が何をすべきか、そして、この未曾有の危機を踏まえ、組織が何をなすべきか、今後の組織の危機管理の参考書として、是非本書をご一読いただければと思います。

4. 新型コロナウイルスの感染拡大に直面して

近年わが国では、毎年のように大規模な自然災害が発生していますが、この度の大規模な疫病との対峙は、直近では経験のないことです。自然災害では、自衛隊など国の機関や地方自治体、地域ボランティアなどが災害復旧の先頭に立ちましたが、今回は、病院をはじめとする医療関係機関や研究機関などがその中心的役割を担い、そこに行政が支援する形で危機からの脱出を目指しています。今回、自然災害との比較で最も異なるのは、復旧に向けて大きな力になってくれていたボランティアの大半が介在できないという点ではないでしょうか。その点で、医療関係者にとっては、非常に孤独な活動だと言えますし、我々がこうした活動を支援するためには、わがままな行動を自制し、拡大を抑制するために各自でできることをし、そしてこの教訓を次に活かすこと

だと思っています。

今回のコロナ禍との戦いが収束したとしても、北海道全体が漫然と事態の収束を喜ぶのではなく、例えば道内企業各社が、個々に新型コロナ禍に対する対応を検証した上で、例えばBCP(事業継続計画)からBCM(事業継続マネジメント)へと“進化”させるといった、教訓を活かす取組が何より大切であると感じます。

5. 北海道スタンダード研究委員会の活動展望

■活動の進化

「進化論」を書いた、チャールズ・ダーウィンが、「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である。」という言葉を残しています。

この度の新型コロナウイルスとはまた違ったウイルスによって、再び社会・経済のシステムが機能しなくなる事態が今後とも起こらないとは限りません。今回の災害だけでも、これまでの生活様式、行動様式を根底から見直す必要に迫られる事態も今後十分想定されます。

その中で、我々北海道スタンダード研究委員会の活動の方向性も例外なく変化(進化)が問われていると感じるとともに、この機会に目指す方向を進化させなければならないと考えます。

■変容する価値観と普遍の価値

これまでの活動は、従来の社会・経済システムや生活の延長線上であり、その枠組みは継続性を前提として議論されてきたと言えます。例えば、直近のワークショップでは、特に海外からのインバウンド(ベトナムからの若者を北海道に招こう企画)を中心に議論を重ねてきましたが、それまで当たり前と考えていた観光や人の交流に対し、これまで通りの考え方はもはや通用しないのかもしれません。

一方で、社会の在り方が変容したとしても、一部の文化や歴史、自然環境など北海道固有の特性、魅力は、普遍の価値を持ちつづけるということも忘れてはならないと考えます。

■変わるものに向き合う

今回の新型コロナ禍で、どこまで生活様式や行動様式が変わっていくのか、見通すのは容易ではありません。ただ、格差や不公平など理不尽なこともいっぱい出てくるのは間違いないと思っています。

北海道ではこれまで強みと思っていたインバウンド観光への高い依存度が、本道経済のダメージを深くし、本道経済の回復速度を遅らせます。“食”という面での優位性は保ちつつも、物流システムは見直しが必要になるかもしれません。

その中で、“非接触”では圧倒的に優位なオンライン環境での交流や連携が一気に増えて、娯楽も含めてネット上での社会・経済活動が肥大化するの、容易に想像できます。逆に、北海道にとってハンディと感じていた“距離”のマイナス面は減少するのかもしれません。

さらに、北海道の特性を活かした新たなビジネスモデルが創造されたり、新たな産業形態、新たな生活様式が生まれたりする可能性もあると考えます。

■今後の活動展開

我々は、現在はまだ見通せない新型コロナウイルスの収束後の新たな生活様式・行動様式の中で、さらには社会・経済活動の変化やその進み具合を見据えながら、北海道という地域とどう向き合っていくべきなのか、どう元気にしていくべきなのかを、当研究委員会において議論していかねばならないと考えています。

さらに言えば、物質的な豊かさを追求する社会から、真に心の豊かさを醸成を求める社会へ、経済・産業の発展一辺倒から文化や歴史、自然環境を重んじ、より個性的で包容力のある教育システムなど、今後日本のみならず、世界的な価値観の変容に、どう先んじて対応していくのか、普遍の価値をどう大切にしていくべきなのか、当会の研究テーマとして検討していかねばならないのかもしれません。

引き続き当会の活動にご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。